

山形県酒田市生石2遺跡発掘調査概要報告4

Overview on Archaeological Excavation of the Oishi 2 site in
Sakata City, Yamagata Prefecture, Vol.4

青野 友哉 AONO Tomoya
佐藤 祐輔 SATO Yusuke
渡部 裕司 WATANABE Yuji

要 旨

本稿は山形県酒田市生石2遺跡の第4次調査の概要報告書である。本年度は、2020年度に試掘調査した現地表が標高14.0m付近の低地部分に10m×5mの調査区を設定し、本発掘調査を実施した。調査の結果、古代の遺物が出土する流路跡1箇所と縄文晩期から弥生時代の遺物包含層を検出した。調査は厚い表土層及び埋土の除去に手間取ったため、遺構確認を行ったのみで掘削はしていない。本格的な遺物包含層の調査は次年度以降に行う。

1. 研究の目的

東北芸術工科大学では2020年度から「庄内地方の特性に基づく遺跡・遺物の活用の研究」を開始し、縄文～弥生時代を対象にした遺跡の調査・研究と現代における活用方法を探ることを目的としている。

本報告は上記の計画のうち2024年9月に実施した生石2遺跡第4次調査について概要を記したものである。遺跡の概要については既刊の概要報告(青野他 2021)に記載しているため、本稿では省略している。

2. 調査要項

遺 跡 名：生石(おいし)2遺跡

登 載 番 号：204-041

所 在 地：山形県酒田市生石登路田9-20

調 査 主 体：東北芸術工科大学(学長：中山ダイスケ)

発掘担当者：青野友哉(東北芸術工科大学教授)

調査参加者：東北芸術工科大学歴史遺産学科准教授：佐藤祐輔、1年：佐藤柚奈・加々島楓花・猪巻かの子、2年：大沼賢史・阿部真郷・鈴木麻帆・佐藤響・半杭牧・桑原葵・木村美咲・廣川真実・須和部寛太・小関優美、3年：岡部 晏空・菅 凜歩・川上 茉央・池田綾音、4年：中村 悠河

作図・トレース：青野友哉・佐藤祐輔

調 査 面 積：50㎡(10m×5m×1箇所)

調 査 期 間：2024年9月17日(火)～9月20日(金)

出土文化財：縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器

出 土 数 量：1箱[内寸679×367×122mm]

3. 発掘調査の方法

2024年度の調査区は東平田郵便局北側の休耕地(芸工大1区)とし、弥生時代以前の包含層を面的に調査することを目的とした。芸工大1区とした標高14.0m付近の低地部分は、2020年度の試掘調査により、テストピット3(TP3)から弥生時代の甕の破片が1点出土しており、同時代の遺物包含層が残存している可能性が高いと考え、同じ地点に調査区を設けることとした。

テストピット3の遺物の出土層位は、約30cmの客土の下に、褐色砂質土(2層)と暗褐色砂質土(3層)が厚く堆積し、磨耗した土師器・須恵器が出土している。弥生土器はその下層の小礫を多く含む褐色砂質土(4層)から出土した。

2024年度の調査区は南北10m、東西5mで、東側にある東平田コミュニティ防災センター駐車場の擁壁からは4m、南にある東平田郵便局からは4.6m離れた場所に設定した。

掘削は地表面にある建築廃材等の除去と近現代の埋土を除去するために重機を用いて約1m掘り下げ、その後はスコップ、ジョレンを用いた遺構確認を行い、遺物包含層に達

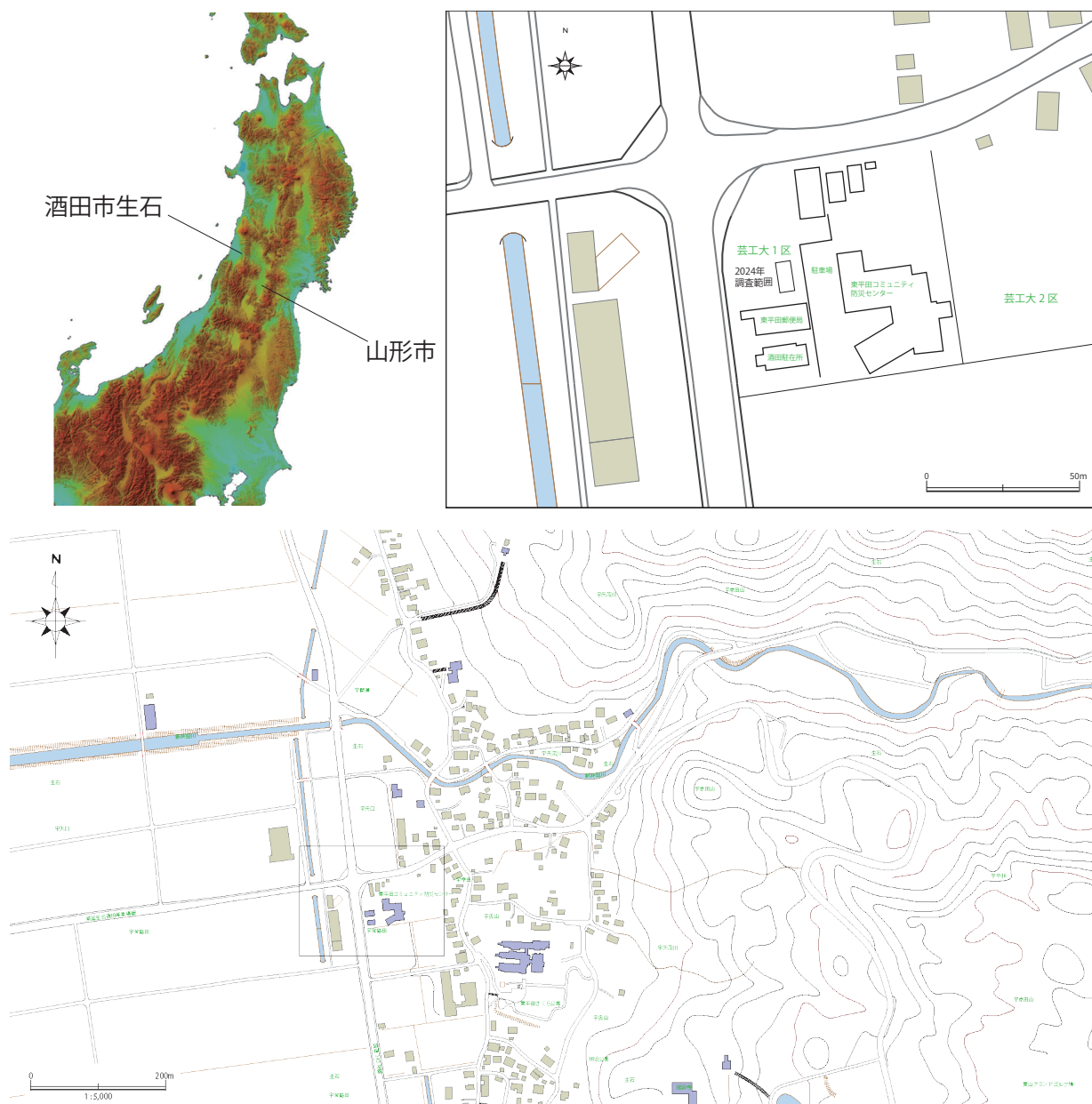


図1 酒田市生石2遺跡の位置(電子地形図(国土地理院)を加工して作成)

してからは移植ゴテを使用した。調査地は1m以上掘削すると水が湧き出る土地であるため、ポンプを用いて排水をしながら掘り下げを行なった。

調査区(10m×5m)には2m×2mのグリッドを設定し、東から西にアルファベット(A～C)、北から南に算用数字(1～5)を振り、組み合わせて呼称することとした(例:A1グリッド)。なお、C1～C5グリッドは東側1mが未掘削である(図2)。

基本土層断面に位置した弥生土器は出土位置を記録したが、その他の土器は層位ごとに一括して取り上げた。

4. 遺構・遺物・サブトレンチ

重機により近代の埋土を除去していくと、埋土の下部から弥生土器の破片が出土し、周囲はプライマリーな土層を呈していることがわかったため、埋土層を5～10cm程度厚く残し、人力による掘削に切り替えた。

調査区の南側では、砂利が東西方向に溝状に広がることを確認できたため、流路跡として範囲の確認に努めた。

調査区北側では厚く残した埋土層から摩耗した土師器・須恵器の破片が5m×2mの範囲に面的に広がる状況を確認

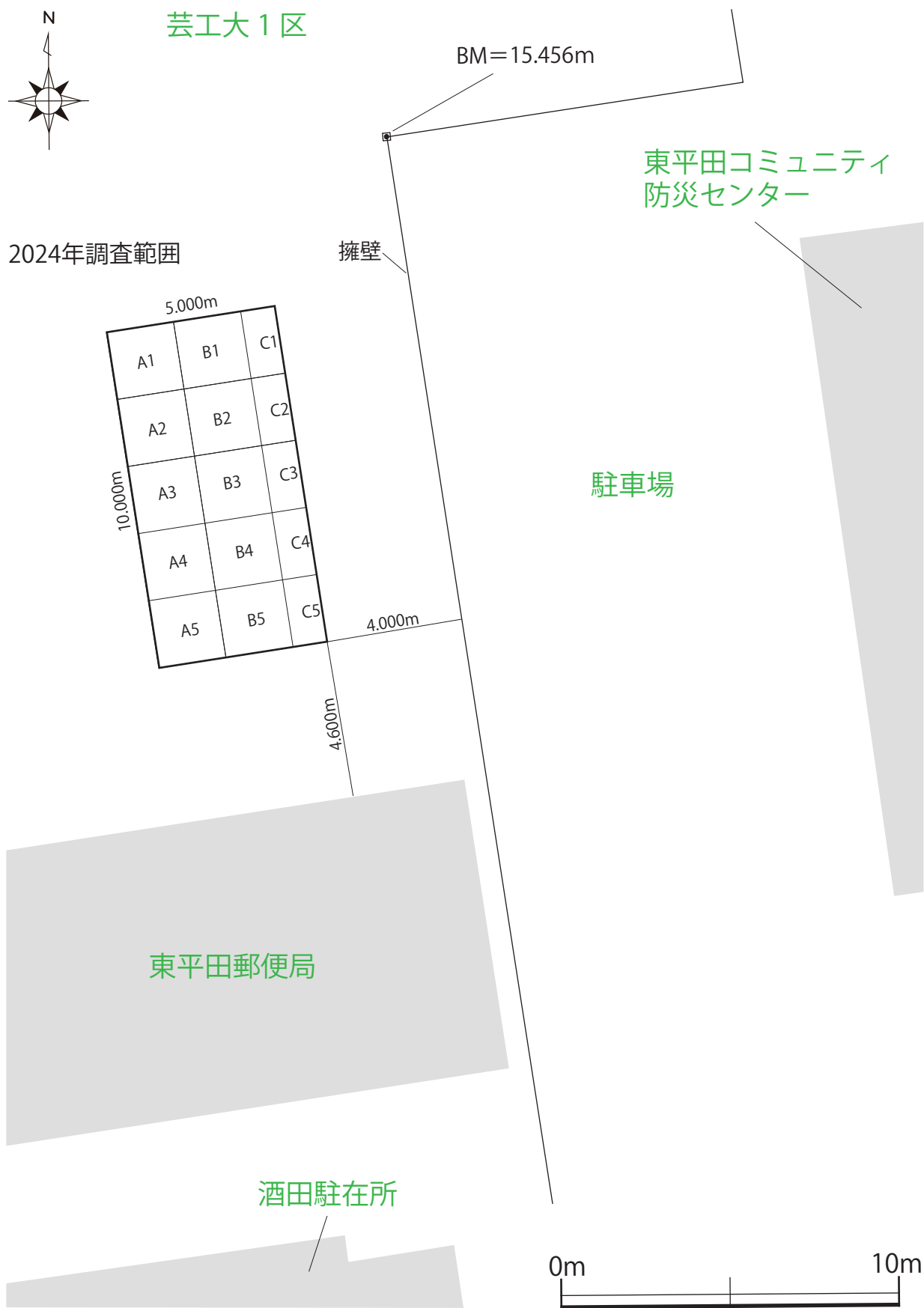


図2 2024年調査範囲

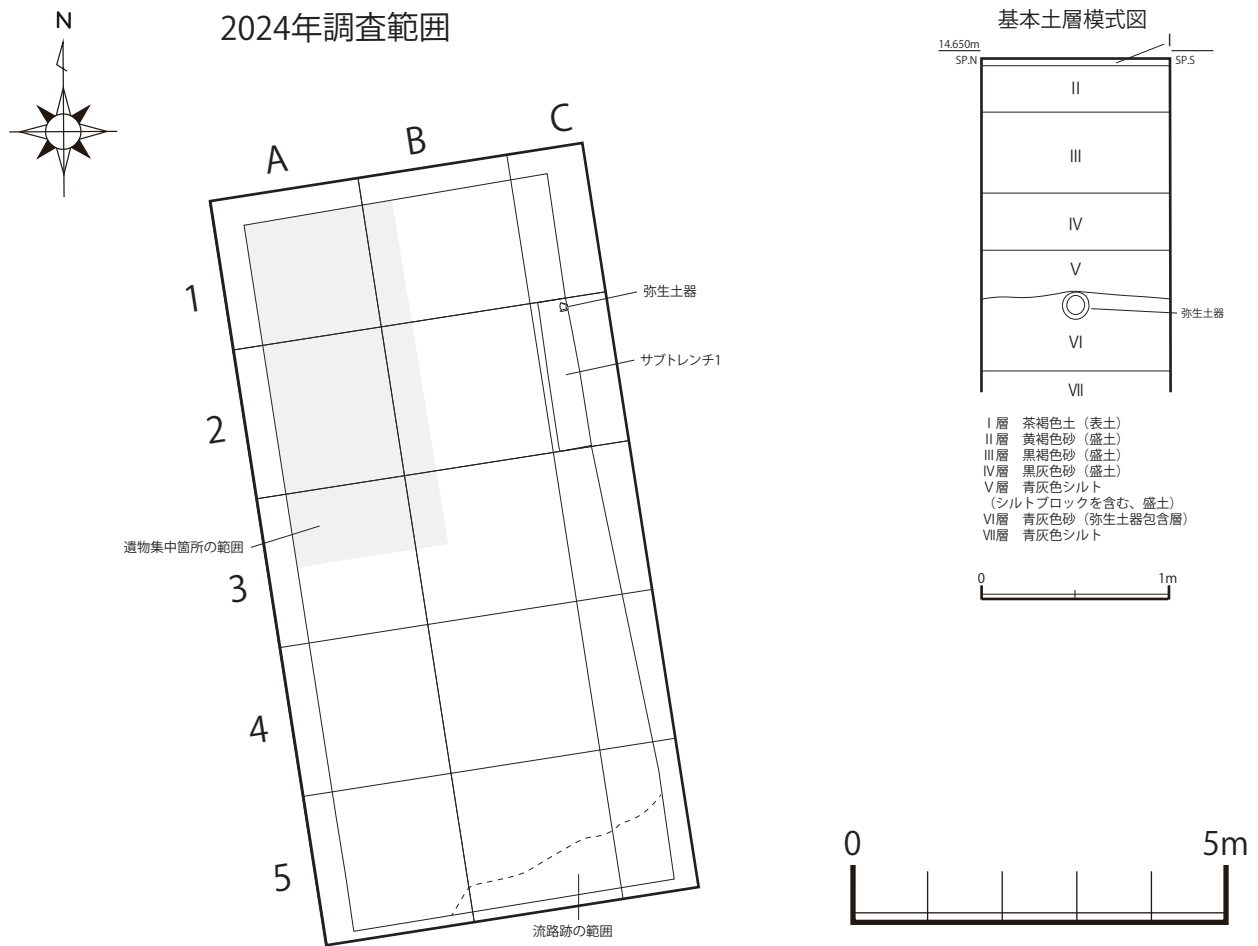


図3 調査区の平面図及び基本土層図

した。遺物の直上にはビニールが堆積しており、古代の遺構である可能性は低いと考えたが、遺物集中範囲として調査した。

(1)流路跡(図3、写真2)

流路跡は調査区南側に位置し、現状で幅1m、東西の長さ3mであるが、北側以外はすべて調査区外に続いており、全貌は不明である。流路跡の内側は水が常に湧き出しており、1~2cm大の小礫が堆積し、土師器・須恵器の破片も混じる。遺構の周囲は青灰色砂質土であり、流路跡との境界は明瞭である。

調査は遺構確認と範囲の図化を行い、遺構内の掘削は行っていない。

(2)遺物集中範囲(図3、写真4)

A1グリッド、A2グリッドを中心に摩耗した土師器・須恵器の破片が面的に広がっていた。遺物が摩耗していること

から、河川の氾濫等により上流から流されてきたものと考えられる。土器破片の出土状況は5m×2mの範囲で水平に出土し、土器破片も表裏面が水平になっており、ある程度広く平坦な部分の底に堆積した状況と思われる。よって、水田跡の鋤床に堆積した遺物が集中して見えている可能性も考えられる。時期は遺物から古代以降であるが、直上にビニールが堆積していることから現代に近い水田跡である可能性もある。

(3)サブトレンチ1(図3、写真6)

調査区東側では弥生土器の遺物包含層を確認するため、C2グリッドに1m×0.5mのサブトレンチを設けた。すでに壁面に弥生土器の底部が見えていたため、その周辺を掘り下げたが、それ以上の遺物は出土しなかった。ただし、下位の青灰色シルト層には遺物は存在せず、その直上の砂層が遺物包含層であることがわかった。

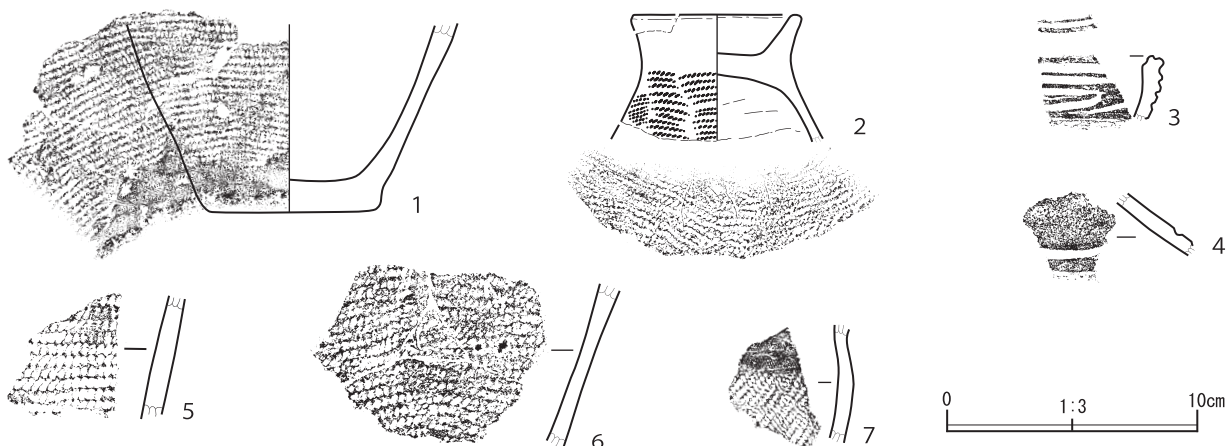


図4 調査区出土土器(1: VI層)

(4)出土遺物(図4、写真8)

縄文時代晩期末葉～弥生時代前半期の土器が破片で出土している(図4-1～7)。図化できるもののみ実測を行った。

1は甕の底部～胴下半で、横位のLR縄文を施文するが、底部付近は無文帯としている。内面および底部はナデ調整。2は蓋のつまみ部～体部の破片で、1同様に横位のLR縄文がある。体部外面にはススが、内面には漆状塗膜が付着している。3は縄文晩期末葉の浅鉢で、特殊工字文の変形匹字文と斜行する補助単位文を施文する。外面沈線内に赤彩が残る。4は蓋の体部破片で、平行沈線を2条施文する。5～7は甕の胴部破片。

5. 成果と課題

2024年度の発掘調査では、標高13m前後の土層に縄文晩期から弥生時代の遺物包含層があることを再確認できた。今後も、面的な調査を実施することで当該期の遺構の検出が期待できるとの見通しを得られた点が成果である。次年度以降は調査期間を十分に確保して臨みたい。

謝辞

調査・報告にあたり、下記の機関および個人より協力を得た(敬称略)。庄司はつせ・庄司 博、酒田市教育委員会、東平田コミュニティ防災センター、東平田郵便局。

参考文献

青野友哉・北野博司・渡部裕司 2021「酒田市生石2遺跡発掘調査概要報告」『歴史遺産研究』第15号、東北芸術工科大学、pp.51-58

青野友哉・渡部裕司 2023「酒田市生石2遺跡発掘調査概要報告2」『歴史遺産研究』第17号、東北芸術工科大学、pp.59-62

青野友哉・北野博司・渡部裕司 2024「酒田市生石2遺跡発掘調査概要報告3」『歴史遺産研究』第18号、東北芸術工科大学、pp.43-48

酒田市教育委員会 1987『山形県酒田市生石2遺跡－宅地造成に伴う緊急発掘調査の概要－』pp.1-24

酒田市教育委員会 1995『山形県酒田市生石2遺跡－東平田コミュニティ防災センター建設に伴う緊急発掘調査の概要－』pp.1-10

山形県教育委員会・山形県埋蔵文化財緊急調査団 1985『酒田市生石2遺跡 第2次調査説明会資料』pp.1-13

山形県・山形県教育委員会 1985『生石2遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書 第89集、pp.1-34

山形県・山形県教育委員会 1987『生石2遺跡発掘調査報告書』(3)山形県埋蔵文化財調査報告書 第117集、pp.1-180



写真1 調査区(芸工大1区・北東から撮影)



写真2 流路址の検出状況(東から撮影)



写真3 遺物包含層の調査(南西から撮影)



写真4 遺物集中面の状況(南から撮影)



写真5 調査区全景(北西から撮影)



写真6 基本土層(東壁面・サブトレンチ部分)



写真7 弥生土器出土状況(東壁面)



写真8 調査区出土遺物